

## 2010年度第4回物学研究会レポート

「コモンズ これから：の生活のデザインのオルタナティブ」

渋谷 健 氏

(コモンズ投資株式会社社長、シブサワ・アンド・カンパニー株式会社代表取締役)

2010年7月20日



BUTSUGAKU  
物学研究会  
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

行き過ぎた市場主義経済やグローバリズムを反省し、新しい社会や経済の創造や、そのための活動が人々の関心を集めるようになっていきます。

7月の講師、洪澤 健さんは、「コモンズ」「サステナビリティ」「オルタナティブ」といったコンセプトに注目し、競争原理とは異なる企業マネジメントや投資について、多くの著書をまとめられています。今回は、「コモンズ これからの生活のデザインのオルタナティブ」と題し、これからの社会や生活のかたち、そしてデザインへの期待をお話し頂きました。以下、サマリーです。

## 「コモンズ これから：の生活のデザインのオルタナティブ」

### 洪澤 健 氏

コモンズ投資株式会社社長、  
シブサワ・アンド・カンパニー株式会社代表取締役



01 ; 洪澤 健 氏

### ●コモンズとは？

ただいまご紹介いただきました洪澤健と申します。私の仕事の中心は「投資」ですが、本日は、「コモンズ」「デザイン」、「オルタナティブ」というキーワードに沿って、投資、生活、未来について、私なりの考えをお話したいと思います。

2001年9月11日、私はちょうど、アメリカのシアトルにいました。その日は、シアトルからワシントンに飛ぶ予定だったのですが1週間足止めされました。そんなときに、シアトル市民がインターナショナルファウンテンという広場に集まりはじめていました。数時間前にニューヨークで何千人と命を落とした人々の冥福を祈ること、そして未来が平和な社会であってほしいという痛切な願いが、シアトル市民をつき動かしたのだと思います。

こうして人が集まるのは、ある意味で「commons」という言い方だと思います。「common ground」という「共有地」に人々が集ってくる。そこには何かしら「共感」という共通する意識があるのだと思います。そしてこの一人ひとりが、譬えるならば「滴」ではないか。一人ひとりの人間が持っている「思い」が世の中を変えていくのだと思います。この「滴」という言葉をちょっと頭の隅に置いておいてください。

さて、話題は変わりまして、「東京都中央区日本橋兜町4-3」。かつてここに何があったか？

ここは「銀行発祥の地」、140年ぐらい前には第一国立銀行、日本初の銀行がありました。その銀行は私の祖父の祖父であった渋沢栄一がつくったといわれています。渋沢栄一は、この銀行のほかに500社ぐらいの会社と600程の社会福祉事業に携わったといわれ、「日本の資本主義の父」と呼ばれています。

この第一国立銀行は、「国立」とありますが100%民間の会社で、三井組や小野組といった当時の豪商が出資しました。つまり当時のベンチャービジネスだったわけです。栄一はそのベンチャーを次のように語ったそうです。「銀行は大きな川だとすれば、銀行に集まってこない金は、溝にたまっている水やポタポタ垂れている滴と変わらない。単なる滴が銀行に集まることによって、大河となって国の発展に貢献する」。こうしてできたのが「第一国立銀行」だったわけです。私は日本の資本主義の原点は、ここにあったと考えています。一滴一滴の滴が寄り集まって、国の発展に貢献しましょうという気持ちがあったのです。一人ひとりの思いや願いが集って、社会を変え、つくってきたのだと思うのです。

さて、ここで話をさらに展開したいと思います。最近よく「安全、安心」とか「安心、安全」という言葉を聞きます。どっちが正しいのでしょうか？ 安全だから安心するというのは当たり前のこと。逆に安心したいから安全を求めるということも理解できます。しかし安心だからと言って絶対に安全でしょうか。これは違うように思います。

これを投資に置き換えてお話しします。会場の皆さんの金銭的資産は恐らく銀行預金かと思います。日本人の多くはリスクのない安心なものを求めるからです。しかし、銀行預金が本当に安全でしょうか？ 今、日本の公的負債は巨額であり、ギリシャのように経済破綻に陥ってしまう可能性も皆無ではありません。この公的負担を処理するには、大きく2つの選択肢しかありません。1つは、借金の棒引きです。日本政府はかつて1946年の終戦時に一度だけ借金棒引きをしています。もう1つはリフレ政策です。つまり、お札をどんどん刷ってハイパーインフレを起こせば、貨幣価値が下がって公的負担の総額も減るというわけです。しかし、これはモラルハザード、やるべき政策ではありません。しかし、安心と思っていることが本当に安全なのか？を考えるヒントにはなります。

## ●オルタナティブの源泉

さて、本日のもう1つのキーワードは「alternative＝オルタナティブ」です。投資の世界で言えば、「alternative investment」で、伝統的な投資と比べて非伝統的あるいは代替的な投資手法といわれています。

そもそも「alternative」という言葉は「alter」と「native」の2つでできています。「alter」は変える・改めるという意味、「native」は原住・もともとそこに在るということです。つまり、alternativeを私なりに解釈しますと、非常識の中から新しい常識を生む」ということです。ですから、非常識だからと排除するのではない、実は非常識こそが次の進化につながる…「alternative」とは、そういう考え方ですね。

では「常識」とは何か？ 渋沢栄一は『論語と算盤』の中でこう語っています。ここでは、論語＝道徳、算盤＝経済と置き直すこともできます。栄一は、常識とは「智」、「情」、「意」の三者が権衡を保ち、平等に発達したものです。つまり彼が言いたかったのは、たくさんの知恵や知識を生かすには、同じぐらいの水準の情愛（emotion）や意思（will）が必要だということだと思います。「常識」とは「智、情、意」のバランスがとれていること、さらに一人ひとりが常識を持っていれば、それが先述の滴のように集って、大河のごとく社会の常識が自然と形成されるだということだと思います。

ここで思い出したのが「オズの魔法使い（Wizard of Oz）」という映画です。主人公はドロシーという女の子で、常識の世界から非常識の世界に放り込まれてしまいます。そしてドロシーちゃんが常識の世界に戻るために3人の助っ人が現れます。一人は、知恵を欲しがっているかかし。もう1人は心を求めているブリキ製の木こり。最後は勇気が欲しい臆病なライオン。つまり、この物語は、主人公が「智、情、意」を象徴する助っ人の応援を受けながら非常識から常識の世界に戻ったというものなのです。「智、情、意」のバランスを重視するということは、東洋だけでなく東西という垣根や時代を超える普遍的な考えなのだと確認しました。

## ●生命論と機械論

さて、今日はデザインの話ということで、自分なりのデザインとは何かを考えてみました。私にとってのデザインとは、「value creation＝無から何かをつくる、価値を創造する」ことです。その延長には当然「資産＝asset」が発生します。そして、資産（物）が存在するためには「場所＝間」が必要です。「間」には、空間、人間、時間の3つの「間」があると考えます。

金融の世界でいうと特に時間、「時間的価値＝time value」は、金融論というオプション理論の中心的テーマです。時間の長さですが、金融では長さよりも、限られた時間の中でどれだけの変動があるかの方が重要です。人間も同じかもしれません。ある一定の時間の中でいろいろな経験をする、夢や想像力を発揮する・・・そうしながら“value creation”が生れてくるのだと思います。

さて、現在社会の機軸である資本主義の構造を縦軸と横軸とで整理してみました。縦軸は企業の株価、横軸は時間です。一般的に、日本企業の経営者と外国人投資家やファンド関係者は意見が合わないことが多いです。それは、投資家やファンドはお客様のお金を効率的に運用して増やさなければならぬという宿命があり、一方、投資対象となる企業経営者は目先の利益を追うだけではすまされないという立場の違い、要は横軸である時間に対する感覚の違いなのだと思います。投資家やファンドにおける合理的・効率的な資本活用は、より短く、より高い回収を目指すこと。対する経営者は「より高く」という部分は投資家と同じだけど、必ずしも「より短く」が現実的ではない。このズレが投資家と企業家の埋めがたい差異だと思います。

同じような対立論として、「機械論：生命論」という話もあります。機械とは「部分＝部品」があって全体が形成される。生命とは、全体を成立させるために命があるという視点です。医学で考えるなら、西洋医学は機械論的であり、東洋医学は生命論的であるといえます。もちろん、機械論的、生命論的、西洋医学、東洋医学、どちらのほうが有効か、どちらが正しいとかという二者択一の話ではありません。

機械は、一つひとつのパーツが合理的・効率的に動くことが基本です。一方、生命は、矛盾だらけなんですね。以前、黒川さんの「人は矛盾を廃除しようとするけど、矛盾こそが美しくて、いろいろな可能性が潜んでいるんだ」という話がとても印象に残っています。

DNA研究の第一人者村上和雄先生の『生命の暗号』でも、「人間の性向をDNAで語ろうとする傾向があるが、実際はDNAのスイッチがオンかオフなのかということである。つまり、良い環境にいて、良いDNAのスイッチをオンにすることこそが大切なのだ」と語っています。そして残念なことに、多くの場合DNAのスイッチはオフになっているそうなのです。しかし、村上先生は「DNAのオフ状態の中にこそ、進化の記録があるかもしれないし、進化の可能性が秘められているのかもしれない・・・」と付け加えています。

このように考えてくると、デザインとかクリエイションの仕事とは、合理的・効率的に突き進めていくようなオンの状態よりも、遊んでいたり、風呂に入ったりなどオフの状態のときにこそ、新しい何かが生れてくるのかもしれない。その意味では、いつも自分をオンの状態にしているだけでなく、無駄な時間を取って設けることこそが、クリエイションの可能性を広げることになるのかもしれない。これは生命論的な立場の話です。

しかし、機械論的に考えると、無駄や矛盾は効率的・合理性ではないから排除すべきという考えなんですね。私がいる金融やビジネスの世界は、機械論的な発想をします。しかしそれを追求し過ぎると、限界も危険性もあると思うんですね。たとえば、リーマンショックです。あれは、ある資本をいかに効率的・合理的に回して収益を上げるかを追求しすぎて暴走した結果です。機械論の暴走には、あつたリスクが付きます。そもそも、機械は、余り時間軸を考えません。機械が壊れたら部品を取りかえればいい。生命もその長さには限りがありますが、DNAという仕組みを通して次世代にバトンタッチすることができる。生命はこうして進化の仕組みを内在してきたのです。こうした生命論的な発想を金融の世界に持ち込めないかと、後述いたしますが、私は「コモンズ投信」という運用会社を設立いたしました。

さて、この機械論、生命論という話には、時代背景もあると思います。

ノーベル経済学賞を受賞したミルトン・フリードマンは、1970年に有名な論文「only one social responsibility of Business」を著しました。ここでは「企業の社会的責任＝activities designed to increase its profits」について述べています。彼は、プロフィットを高めることが唯一、企業の社会

的責任であると語っています。ところが私にはどこか腑に落ちないものがあつたんです。

今世紀に入って、やはりノーベル賞を受賞したムハマド・ユヌスは、グラミンバンク、つまりマイクロファイナンスという、まさに滴のような金融方法によって発展途上国の貧困問題の解決を提唱しました。そのキーワードが、「People are not one-dimensional entities, they are excitingly multi-dimensional」、つまり多様性の大切さを説いています。多様な人間が存在する社会において1つの価値観がすべてを支配することはできない。だから「profit maximization＝プロフィットの最大化」だけではなく、いろんな価値観が共存することの大切さを示唆しています。

同じノーベル賞受賞者の意見にもかかわらず、2人の違いは面白いと思います。そこには時代背景があるのでしょう。20世紀は、欧米を中心とした一神教的な価値観、つまり合理性・効率性が追求されていました。ところが、21世紀に入ってくると、アジア、インド、アフリカなど多様な国々がそれぞれの価値観や宗教観に基づいて成長を始めた。さらにインターネットが普及して、互いの存在や考えを知りやすくなった。20世紀と比べると、21世紀は多様性に満ちた、混沌とした、困難な世紀になるかもしれません。しかし、多様性を取り込めた社会や企業こそが、21世紀には、繁栄するんじゃないかという予感もあります。

効率や合理と似た言葉として「能率」があります。能率とは、そもそも「見える無駄を省き、生産性を高める」ということであり、日本の高度成長を支えたモノづくり精神そのままです。しかし最近その定義が変化してきたそうです。つまり、従来の目に見える経営資源というのは氷山の一角であって、ほとんどは水面下の見えない資源だと。そこをいかに活性化するかが、現代の能率の定義なのです。つまり、一見、無であるかもしれない何かにこそ可能性が隠れているということです。投資の世界にも同じようなことが起きています。見えない価値をどうやって見えるようにするのか、大切なテーマだと思います。

## ●コモンズ投資とは？

このような思いから、私は「コモンズ投信」を設立しました。そして3つの視点を重視しています。

1つは長期投資。通常、「長期」といっても、1年、長くても5年ぐらいの感覚しかないと思いますが、私たちは、子どもが大人になる30年という長期戦で考えています。長期投資を思いついたきっかけは、自分が子どもをもったこともあります。自分の子をはじめて抱いた瞬間に、子どもたちが成人したときにいろいろなことを伝えたい、投資もそのひとつであると思いました。同時に、オルタナティブと言いますか、30年投資という常識的な投資とはちょっと違う、非常識なボールを投げたいという意図もありました。

2つ目は、30銘柄に厳選した投資をしていることです。人口減少社会に突入した日本において、30年後も世界を舞台に活躍しているだろう企業を30社に厳選して、集中的に投資してみようというアイデアです。平均的な会社では、多様性が満ちた世界における日本社会を牽引する原動力にはなれないという思いも込めています。

3つ目は、「対話」です。従来のように、投資家側が一方的に「モノ申す」のではなく、双方が対等な立場で対話をするのが重要だと思います。こうした対話は、企業家側にも今までなかった情報源や客観的な視野を与えることになるし、投資家には企業の状況をよりよく知るための機会となります。つまり両者にとっての「見える化」です。

さて、コモンズ投資の仕組みについてお話したいと思います。先述しましたが、長期投資を思いついたきっかけは、私自身が父親になり、子どもに何かを伝えたいと考えたことでした。まず私は、子どもの名で口座をつくって、1万円とか2万円とか毎月定額を積み立てる投資をはじめました。そこで気づいたのは、この投資は、子どもの大学や留学資金として役立てばと思ってはじめていたので、短気的な上がり下がりが全然気にならないということでした。毎月自分の銀行口座から生命保険が引き落とされるのと同じような感覚だったのです。それにも関わらず、引き落としのたびに銀行に販売手数料を2%払わなければいけなかった。そんなときに、販売手数料ゼロという投資があることを知ったのです。そこでは私はコモンズ投資を立ち上げて、販売手数料ゼロという投資をはじめ、もちろん子どもの名義で毎月積み立てています。

次に、販売手数料ゼロの仕組みについてお話します。皆さんは「チョコハン＝直接販売」という言葉をご存知かと思いますが、このチョコハン、実は金融では行われてなかったことなのです。理由は儲からないからです。金融機関の多くは販売手数料が経営基盤の1つなのです。しかし、チョコハンすることによって流通を簡潔化・見える化し、さらに余分なコストを削ることによって、一見非常識な販売手数料ゼロという仕組みを実現することができました。しかし、投資はボランティアではないので信託報酬はかかります。コモンズ信託では年率1.15%です。積立投資していただく方は、10年、20年、30年と長期でつき合っていただく方が多く、コモンズ投信の場合、75%は積み立てです。ですから、長期的に見ると、可能性が大きいと思っています。

普通、投資をグラフで表現すると、右上がりて上がっていく形が理想だと思うのですが、実際は上がったり下がったり曲線を描きます。上下の変動が烈しいと不安になる投資家も多く、やっぱり投資は嫌だ、元本保証がいいやという話になります。しかし、実際には、積み立てる最中は実は下がって来てくれたほうが有利です。もちろん、下げ続けるのではなく、いつか上昇に転じる必要がありますが、仮に投資を始めた水準まで戻らなくても、購入の平均価格が下がっているのです。ですから、10年、20年、30年後でも繁栄する企業であれば、一時的、短期であれば、弱くなっているときというのは、実はそれは、さっき時間的デザインという話をしましたけれども、その時間を使って少しずつ積み立てるといえるのはすごくメリットがあるという、それをドル・コスト平均法といいます。

## ●岐路に立つ日本

大局から今の時代を見てみると、本当に日本は岐路に立っている感じがします。

1990年が直近の経済のピークだとすると、そこから失われた10年どころか失われた20年になっています。1990年の前の30年は、日本は高度成長だった。さらにその前の30年を振り返るとそれは戦時・戦後で、常識が非常識に、非常識が常識になった時代でした。つまり過去60年を振り返ると、破壊の30年があって、繁栄の30年があったといえるのではないかと。さらにその前の30年は、日露戦争が代表するように日本が西洋社会に追いついた繁栄の時代で、さらにその前の30年は明治維新ですね。維新以前の30年は270年ぐらい続いた江戸時代の常識が覆された時代でした。こうして歴史を振り返ってみると常識と非常識の反転の繰り返しですね。そして今、我々は破壊の30年サイクルの20年目に立っています。

もしこの30年説が正しいとすれば、恐らく、今はまさに常識が覆されて、新しい常識をつくろうともがいている時期といえることができます。ですから、必ず夜明けは来ると信じています。ただそのときの繁栄は、私たちが知っている繁栄とは違うものかもしれません。そういう意味では、干支の60年周期、還暦というのは人生をゼロにリセットすることなのですね。先人の知恵には驚くばかりです。

バブルのピークから見ると、今、日経平均は4分の1です。そんな中で、ヤマダ電気とニトリという会社は、10倍以上になっています。2社で共通しているのは、私たちのライフスタイルデザインを変えたという点です。そもそも「リターン＝収益」とは「お返し」と言うことだと思います。つまり、「どうもありがとう、おかげさまで」ということなんだなあという気がします。社会から「どうもありがとう」と感謝される企業が「お返し」として収益をあげることができる。この「お返しの連鎖」によって、経済社会というのは豊かになっていくんじゃないのかなと思います。先ほど、コモンズ投資を説明するときに、30年投資についていろいろ小難しいことを言いましたが、私が目指していることは、要は、この「お返しの連鎖」をお手伝いすることかなあと思っています。

コモンズのチャレンジというのがあって、1つは、自分という「個」ではなくて、自分の子どもとか孫とか、大切な人のために投資をしましょう。もう1つは、「時間」の意識。私は日頃から、日本人の「将来観念」は独特だと考えています。「一期一会」というのがありますよね。そのときのご縁を大切に、その積み重ねが日本の時間なのではないかなと思います。最後は30年投信のデザインコンセプトは、30年を一緒にみんなで作っていきましょうということです。この考えに、今では全国で1,700人ぐらいの方が賛同して、投資をしてくださっています。私たちは直販をやっているのです。ゆっくりとしか広がりませんが、結果的にいい運用ができるのではないかなと思っています。

## ●まとめ

最後に「子のたまわく、これを知る者は、これを好む者にしかず。これを好む者は、これを楽しむ者にしかず」という格言についてお話したいと思います。私の曾祖父の渋沢栄一は論語の研究者でもあり、これを以下のように解説していました。「物事を知ること大前提であります。だけれども、知っているだけであれば行動は起こさない。好きという感情が芽生えて、はじめて行動に移るのではないか。だから、好きであることが知ることより大切である。しかし好きという感情だけだと壁にぶつかると挫折してしまうかもしれない。だから、何より楽しむことが大切である」ということですね。ですから、今まで投資とか運用の世界で楽しむことなんてあんまり大っぴらにいうことできませんでしたが、楽しむということがとても大切じゃないかと思っています。

私たちの運用会社では「夏休み絵画コンクール」をやっています。15歳ぐらいまでのお子様に夏休みを利用して、はがきに「30年後の自分」もしくは「30年後の社会」を描いてもらっています。もし周りに小学生、中学生ぐらいのお子様がいらっしゃいましたら、ぜひ応募してみてください。

(了)

2010年度第4回物学研究会レポート

「コモンズ これから：の生活のデザインのオルタナティブ」

渋澤 健 氏

(コモンズ投資株式会社社長、シブサワ・アンド・カンパニー株式会社代表取締役)

---

写真・図版提供

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および  
商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの  
無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2010 BUTSUGAKU Research Institute.